

# 五才児の記録



三才児を迎えて

四月十六日 水曜日

遊戯室でリズムあそびをする。三才児も遊戯室にきて五才児のすることをみている。

「お花の種をまきますよ。」

と先生がぱつと種をまくまねをすると、先生が種をまく回ごとに子どもたちはあちら、こちらにどんでいく。

「遠くにもまきますよ。」

と先生は遠くをねらって種をまく。子どもたちは遠くにもとんでいく、そして先生はピアノをひきはじめる。

ピアノをひきながら、

「いっぱい種をまきましたよ。お日さまがぼかぼかとあたっていますよ。」と子どもたちをみながらピアノをひきつつける。

「芽がやつとでてきましたよ。」

先生はまだずわったままでじつとしている子どもをみて、

「まだ芽でない種もありますね。いまにでてくるでしょうね。」

子どもたちは先生のことをききながら、そしてピアノの音をききながら思い思いのかっこうをして、立ちはじめ。しばらくして、

「そろそろお花が開いてきましたよ。きれいなお花が咲いたわね。ひとつのきれいなお花もあるし、たくさんのお花もあるわね。」とピアノをひきつつける。

「いいお花にしておいてね。しずかにゆれているお花もあってい

今回は四月の新学期がはじまってから、五月初旬までの一か月間の記録を示す。五才児になって、最初の計画は、「三才児を迎えて」である。次の計画は「ベーブサート」であるが、これはあまり発展しないで終わった。五月一日から「子どもの日」つづいて、「春の運動会」の行事にはいる。

本号には、現場の指導者の側からの記事がいろいろ載っているの  
で、それとあわせてみることによって、いろいろよく理解して頂  
けると思う。とくに、堀合の「五才児一日の流れ」は、この記録と時  
期も同時であるから、てらしあわせて見て頂ければ参考になろう。

磯部 景子  
堀合 文子  
津守 真

いわね。風がふいてもくちやくちやにならないようにね。

春がきましたよ。

お花がおどりだしましたよ。

お花の国のお姫さまや王子さまもおどっていますよ。

ちようちよもとんできましたよ。

お山の方から兎さんもとんできましたよ。

兎さんいろいろなことをしてあそんでいますよ。

かわい小鳥さんもできましたよ。

木の枝にとまっている小鳥さんもありますね。夜がきましたよ。」

ピアノの音がしずかになる。子どもたちは思い思いのかっこうをしてねむりはじめる。

その間、三才児はいすにすわってみている。三才児のクラスの先生が三才児にはなしかけながら、座ったままで五才児の子どもたちのうごきに合わせて、身ぶりをする。先生のまねをしている子どももいる。

四月二十一日 火曜日

遊戯室で三才児といっしょにリズムあそびをする。

「小さい方がいっしょにしましょうって。」

もうじきいらっしやいますよ。

おててをつないで歩く時、ぎゅっとないでね。あら、戸がしまっているわね。戸をあけてきてちょうだい。(遊戯室の出入口の

戸がしまっていた)」

五、六人の子どもが走って戸をあけに行く。

「まだこない。」

といいながら廊下の方をみている。

いすに腰かけている子どもたちも皆、廊下の方をみている。

「それじゃね、歩きながら待っていますよね。」

子どもたちは先生のピアノに合わせて歩きはじめる。

「雨が降っているから傘をさして歩きましょう。」

しばらく歩く。

「だんだん明るくなってきましたよ。雨がやんだらしいですね。

きれいなお花が咲いていますよ。みんなかわいいお花ですね。きれいな大きなお花もありますね。」

子どもたちはつばみになったり、手で花の形をつくったり、ふたりでひとつの花になったり五、六人が手をつないでまわったりする。みんないかにも楽しそうである。

三才児が先生に手をひかれて遊戯室に入ってくる。

「風がふいてきましたよ。お花がみんな散ってしまったのね。」

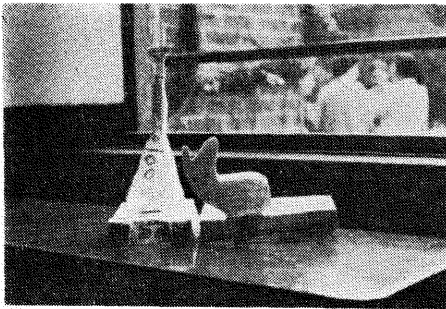
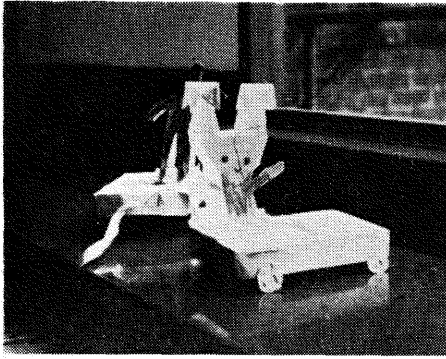
子どもたちの中には突風になったつもりで勢いよくかけ出すものもいる。また一方では体をくるくるまわしているもの、しゃがんで頭をうなだれているものもいる。子どもたちはそれぞれ工夫しながらピアノに合わせている。

「では歩きましょう。」

三才児も先生といっしょに五才児の中に入ってくる。五才児が両側から手をつないであげたりする。ちようちよの曲がきこえてくる。と五才児はみんなちようちよになる。三才児も手をひらひらさせはじめる。三才児のクラスの先生がお花になってすわると、三才児は次第に先生のところにかたまつて花になってすわる。五才児がみつをすいにくると三才児は不安そうな顔をして五才児の方をみる。次に三才児のクラスの先生がちようちよになると三才児は次第にちようちよになる。

五才児の子どもたちの中で花になる子どもがいる。先生や三才児がみつをすいにくる。

その後、小鳥になったり、りすになったりして、三才児と五才児



がいっしょにリズムあそびをする。

四月二十二日 水曜日

三才児にあげるおくり物をつくる。(写真上)

画用紙で箱をつくってふせて下に四つのくるまをつけて車をつくる。そして、ひっぱれるようにリボンをつける。車の上には画用紙で人形や動物や自分の好きなものをつくつてのせてのりづけする。

ペープサート

四月二十八日 火曜日

ペーベサートをつくる。ヨットと港ができあがる。

先生はペープサートを発展させたいと思っている。

机の上にペープサートが二本置いてある。保育室には空箱で何かをつくっている子どもが五、六人いるのみで、他の子どもたちは庭や山や子どもの家などで遊んでいる。ツベルクリン反応の検査がはじまるので先生は庭や山に子どもたちをよびに行く。検査が終つてひとしきり腕をみせあつた後今まで遊んでいた遊びにもどる子どもが多い。

ヨットを作る子ども

Tがダンボールの箱の底にしいてあつた一面がべこべこした紙を持って歩いている。

先生がTをみて、

先生「Tちゃん、その紙、何かになりそうね。」

T 「階段になるよ。」

先生 「そうね、それもいいわね。」

T 「まどでこういうときつかうのね。」

先生 「そう、それもいいわね。」

先生 ははきみで穴をあけているYに、

先生 「穴をあけるのはこれがいいわよ。」と穴あけ器をわたす。

T 「どうやろうかな、これ。」

先生 「どうやったらいいかしら。」

穴をあけてわり箸をたてているYに、

先生 「大きい穴をあけるとぐらぐらするでしょう。小さい穴をあ

なければね。セロテープでとめればいいわ。」

先生 はYがつくっているようすをみて、

先生 「あー そうするの。それでいいわね。」

どうやらYはヨットをつくるつもりらしい。先生のまわりに子どもが七人いる。㊦はみんながつくっているのをみている。

先生 「㊦ちゃん何つくるの。」

㊦は笑って先生のそばにいる。

Tは結局ヨットをつくりはじめる。

T 「海の中で泳ぎたいときはギー、ガチャン。」

などといながら箱の一面をきりひらいて窓のようなものを作っている。

ベープサートの置いてある机のところへ

S 「先生、何つくってもいい？」

先生 「何でもいいわよ。」

先生のまわりに三人の子どもが座る。

先生も絵をかきはじめる。

S 「なにかこうかな。鉄人かこう。いろんな形の鉄人をかいてやれ。」

と先生のそばに座って絵をかいているのがいかにも楽しいというようすである。

ヨットをつくっているところではTが窓をあげ終り、

T 「この中に食べものを入れておくんだよ。」

ととなりの子どもにいう。

女児がふたりTのまねをしてヨットをつくりはじめる。先生はTのところへ布の入っている箱を持ってきて、

先生 「Tちゃんたち、布もあるわよ。三角やこういう布、帆になるわよ。」

Tは布の入っている箱をさぐりはじめる。

先生 「ほらこういう布をはるときれいじゃない？」

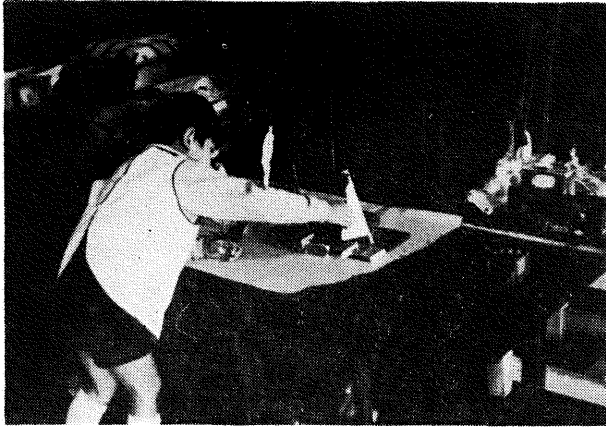
と帆柱にあててみる。先生もしきりに箱の中の布をさがしている。

先生 「ほら、こんなにいい布もあるわよ。」

Yも布をさがしはじめる。

先生は庭にいる子どもたちのところに行く。

ベープサートをつくっている机ではSが鉄人をかいている。



T は帆をつけ終り先生をさがしに行く。

T 「先生、ほら、ヨットができたよ。」

とみせる。先生はヨットをみながら色をぬった方がよいこと、梶み  
たいなものをつけた方がよいことなどをはなしている。

T はヨットをぬり終り、

T 「うん、みなと、みなとかこうかな、箱で。」

と箱をさがしに行く。

T 「先生、これでみなとをつくる。」

といって黄色い箱をふたつセロテープでつなぎはじめる。先生はT  
たちのつくっているようすをみて大きい青い紙を出してくる。

先生「できたヨットを海にうかべましょう。ここに並べてちょうだ  
い。」

T 「先生、みなとができたよ。」

先生 「それじゃ、ここにみなとをつくってちょうだい。」  
と青い紙を机の上にひろげる。

T 「先生、下は色をぬる？ どうする？」

先生 「くつついてみえないところはぬらなくてもいいわよ。」

T は先生といっしょに港を青い紙にはる。

その後先生はペーフサートの棒をつくりはじめると、  
つてわりばしでペーフサートの棒をつくりはじめると、

しばらくしてお弁当の時間になりあちこちで片づけがはじまる。

つくりかけている子どもはつくりつけ先生は他のところから片づけはじめる。

昼食後でき上ったペーフサートを手に持って、ついたてをだしてきて、クラス中大きわぎになる。先生の意図では相当長い期間にわたってするつもりであったが、一度にもり上り、子どもたちはそれで満足してしまい、次にすすまなくなったので、ペーフサートつくりは一日でおわりになる。

### 子どもの日

五月一日 金曜日

鯉のぼりをつくりはじめる。

子どもの日までに鯉のぼりをつくる予定がある。目標としてひとりが二尾の鯉をつくってほしい。

朝、ちぎり紙をはった鯉のつくりかけが机の上においてある。その

の机のまわりに四、五人の子どもの集ってきて鯉をつくりはじめる。先生は紙を持って子どもたちのところにくる。先生は紙を半分においてまわりにいる一人ひとりの子どもに、ここに鯉を

二枚いっしょに切るようにはなしている。ちぎり紙をつくってもよいし、クレヨンでかいてもいいし、などとはなしつづける。紙の

大きさは子どもたちがこのくらいのをつくるといってくるのに応じて先生が準備する。先生もつくりかけのちぎり紙の鯉のつづきをつ

くりはじめる。子どもたちが入れかわりにつくっていて、結局半数くらいの子どもの鯉をつくった。

十センチくらいの小さい鯉から一メートルくらいの大きい鯉などいろいろな鯉ができる。

次に製作を中心にして一日の記録をおってみる。

### 室内で

Y 「ね、先生これくらいいい？」

先生 「あー、いいわね。その大きさとってもいいわね。」

E 「先生、こんなに大きくなっちゃった。」

先生 「いいわね。Eちゃんそれぐらいが。はるのをやってもぬるのをやってもいいわよ。」

E 「お母さんははるのをやってお父さんはぬるのにしようかな。」

先生 「それもいいわね。ずいぶん長い鯉で、はでにおよぐでしょう

ね。」

N 「先生ぼくもつくる。」

先生 「大きさはどのくらいにする？」

N はまわりでつくっている子どもたちの鯉をみている。

先生 「この位？ それともあれ位？」

N がまよっているので、

先生 「これくらいがいいわね。」と紙をおってN にわたす。

先生は子どもたちがのりをつかいやすいように小皿に入れて、子どもたちのところにおいてくる。またみんながつくりやすいように机を移動させる。

E が黒い紙をちぎり紙にしようろこにしているのをみて、

先生 「こういうこいのぼりもいいわね。だんだんうろこがかさなるんですって。」と皆にみせる。

先生 「H ちゃんのもいいわね。S ちゃんのもかわいくていいわね。」

みんなよくできたわね。」と一人ひとりの鯉をみる。

K が庭から帰ってくる。

K 「ぼくもこいのぼりつくる。」

先生 「K ちゃんどのくらいの大きさにしましょう？」

K 「中くらい。」

先生 「そう、中くらいね。」と紙を出してくる。

ⓂとⓀが遊戯室から帰ってくる。

E の鯉をみて、

Ⓚ 「先生、E ちゃんのようなのつくりたいの、紙ちょうだい。このくらい。」

と両腕を思いきりひらく。

先生 「はい。じゃ、Ⓚちゃん、ここでつくるといいわ。」

と紙をわたし机を二脚ならべる。

Ⓜ 「こどもをつくってもいい？」

先生 「いいわよ。紙に形をかいて二枚いっしょにきってね。」

と紙をわたす。

ⓂとⓀがうろこにしようと思つた紙を同時にとりあげる。

Ⓚ 「わたしがみつけたのよ。」

Ⓜ 「わたしもみつけたのよ。」

と紙のとり合いになる。

先生 「あら、あら、どうしたの？ この色、ほらまだこんなにある

じゃない？」と先生は箱の中から同じ紙をさがし出す。

ⓀとⓂは紙をみて

ⓀⓂ 「わー大きいの。」とふたりとも大よろこびをする。

先生はⓀがひれをつけているのをみて、

先生 「Ⓚちゃんおもしろいものをつけたわね。おさかなにこういうのひらひらあるでしょう。Ⓚちゃんよくおさかなをみていたのね。」

という。その他紙をまるくきって目のところを工夫した子どもや、口や尾ひれをいろいろに考えた子どもたちをほめて、皆にみせる。

EとTはぎつきから、ふたりでしきりにはなしをしながらつくっている。

E 「ぼくの方が大きいね。」

T 「ちょっとだけね。」

E 「ふたついっしょにつけると、お父さんとお母さんみたいだね。」

T 「ふたつつけるのに大きいひごがいるね。」

先生 「そうね。大きいひごも、ほら、あそこにあるでしょう。」

T 「ほんとだ、大きい。」とひごをみにいく。

Eは顔をあかくして一枚一枚うろこをはっていたが、とうとう途中で、先生のところに持っていく。

先生 「あら、すてきになりましたね。せっかくこんなきれいできているから、あした、つづきをしましょうね。」

と棚の上においておく。

Eはとぶようにして庭にでていく。

### 砂場

砂場ではYたちが毛虫をかこんで大きわきをしている。

H 「せんせいに持っていきようよ。」

Aがかけ出して先生にいいに行く。そして、くつをはくのももどかしそうに、足にくつをつっかけたまま走ってきて、

A 「さわっちゃだめだって。」

M 「これどくをもってるよ。」

H 「死んじゃうよ。」

A 「しゃべるでやろうよ。」としゃべるを持つてくる。

I 「かして。」

R 「かして。」

先生が子どもたちのタオルを持って庭にくる。

先生 「あら、かわいい、生れたての赤ちゃんの毛虫。その毛虫は蛾になるのね。ちょうちよになる毛虫はまた別の毛虫ね。」

と子どもたちのタオルを目にあたるようにして保育室に入る。

ばけつや丸太を出してきて砂遊びがはじまる。

㊦ 「はっぱを持ってきてあげたわよ。」

男児たちはしゃべるで砂山をつくり、頂上にくぼみをつけて、水を流す。

E 「水を入れるの、ちょっとまって。」

M 「かわいた砂をちょうだい。」

Rが、じょうろを砂山の横におき、わざわざ遠くまで砂をとりにいってバケツに砂を入れて運んでくる。

Mは砂山のふもとに横から穴をほる。

㊦ 「わたし、ほってあげるわ。」

砂山の四方からほっていく。

E 「ずいぶんおもしろいね。」

M 「あー、つづいた、つづいた。」

じょうろに水をくんできて、水を流す。



R 「わーつながった。つながった。」

次の瞬間砂山をくずし、丸太で砂地をたいらになでつける。

E 「こちらは工事中だから水を入れられないで。」

R 「こちらは駐車場。」

M はばけつでかわいた砂を運んでくる。

R は砂のはいたばけつに水を入れ、両手でこねはじめ。

E 「セメント下さい。」

とRのバケツをうけとり、砂地の上にどろどろの砂をなでつける。

E 「これ、おべんとう終ったら、すごいだろうな。セメントがたままって。」

このようにして砂遊びはおべんとうになるまでつづく。

一方Tたちは鯉のぼりをつくり終り野球をはじめ。

五月四日 月曜日

遊戯室で子ども日のお祝いがある。

女兒が三人先生といっしょに鯉のぼりをつくっている。先生は子どもたちが今までにつくった鯉を机の上にならべてひとりずつの鯉のくみ合せをみながら鯉の大きさや数に応じて太いひごや細いひごに鯉をむすびつける。先端に風車をつけて、次にふきなごしをつけて、鯉をつける。できあがった鯉のぼりを保育室のあちこちにかざっておく。十時より子ども日のお祝いがある。

### 春の運動会

五月六日 水曜日

春の運動会の練習

九時十五分から約一時間小学校の運動場に行つて運動会の練習をする。幼稚園に帰つてきて子どもたちは砂場、ブランコ、鬼ごっこ、絵をかくなどあちこちであそぶ。男児のHたちがままごとコーナーで食堂ごっこをはじめ。

帰園する直前にみんなであつまってレコードに合わせて、「オリンピック・マーチ」をする。去年の秋の運動会の時にした遊戯である。

先生にとつてもよくおぼえていて、上手だったとほめられて、みんなうれしそうに帰り仕度をする。

五月八日 金曜日

運動会

朝からまぶしいほどのお天気である。運動会のプログラムもすみ、五才児の「つなひき」四才児の「うさぎとかめ」三才児の「ちようちよと花」の遊戯がある。四月に五才児といっしょにしたようなことを、今日は三才児だけです。

※ ※

(つづく)